

「……………はあ？」

パルスィのその声が仄暗い洞穴に反響する。木霊して、めぐりめぐって帰ってきたところに再び彼女は口を開いた。

「あんた、馬鹿じゃないの？　だって、私は」

そこまで口にしたところで、パルスィは思わず勇儀から目を逸らしてしまう。勇儀の瞳を見つめることができなかつた。目を逸らさないうでいたら、見たくないものを見てしまいそうだった。そうでなければ、見られたくないものを見せびらかしてしまいそうで。

「そんなことは分かっている。その上で、こうやってお前に想いを——」

勇儀がほんの少しうろたえたように言う。取り繕うように口にした言葉はさらに解れを大きくして、それからパルスィの表情が曇って、それを目にしたら、勇儀はもう言葉を続けることができなかつた。

時間が止まってしまったかのように、固まったままパルスィを見つめる。勇儀は耳が痛くなるくらいに静謐に視界を遮られてしまったかのように思えた。それくらいに色彩や明暗が感じられない。動揺、困惑。

沈黙を破るように生ぬるい風が縦穴を駆け登って

き、ようやく時間が動き始めた。

パルスィは俯いた顔を、勇儀から逸らした顔を一切上げずに、声を絞り出す。

「私、今、なにも聞かなかつた。だから勇儀、貴方もなにも言わなかつたことにして……………頭を冷やすといいわ」

勇儀の隠しきれない震えはパルスィの目にもはつきりと映っていた。それが伝染したかのようにパルスィの心も震えて、その震えは指先へと波及していく。滑稽な痙攣を丸めこめるように手を握る。すると、その震えは逃げるように身体の中をめぐる、パルスィの頬を揺らそうとした。表情筋がこわばって、自分が次にどんな顔をしようなのか、パルスィにははっきりと理解できた。

だから彼女はさつと身を翻して、

「じゃ、またね」ひきつる頬と、どうしてだか潤んだ瞳が邪魔するのを振り払って、ぼそりと呟いた。

パルスィが早足にその場を去ってしまったのをぼんやりと眺めたあと、勇儀はそつとため息をついて、縦穴から空を見上げた。

じめじめとした地底（ここ）からはどうでもいいことだけれど、もう陽は沈んでいて、空には月が漂っている。だから、勇儀の視線の先にはただぼんやりとし

た暗闇が、虚空が存在するだけだった。吸い込まれそうな暗闇に見入っていたら、虚空という地続きで地底と地上が存在するのだと、そんな当たり前のことが特別に思える。

そしてそうなるのが当たり前のように、勇儀はふらり地上に引き寄せられていった。

## 二

「でさでさ、どうだったの」

だいたい酒の席で真剣な態度を望む方が間違っている。勇儀だってそんなことは分かってきついているから、だからこうして伊吹萃香と酒を飲み交わしているのだ。萃香のゆるんだ目じりを見れば彼女がどんな返事を待ち望んでいるかは予想がついた。

「おーい、勇儀ー？」

予想がついていたからこそなにも口に出すことができなくて、代りに勇儀は空の盃を萃香に差し出すと、うつむいたまま首を横に振った。

萃香は一瞬目を丸くしたものの、すぐに酔っぱらいらしい覇気のない相貌に戻る。

「……………そっか」柔らかく言って、手にした瓢箪から勇儀の盃へとお酒を注いだ。

これってやけ酒なのかなあ、とか、同じお酒でも祝い酒のほうが美味しいよねえ、とぼんやり考えながら瓢箪を傾ける萃香だったが、そんな思案は注がれるお酒の水音とその芳香に混ざってすぐに霧散していった。

あんまり細かいことは考えたくなくって、それでもやはり勇儀のことは気になってしまう。萃香は盃へお酒を注ぎ終えると、今度は自分の口に瓢箪を傾けた。

そして顎を引きながらちらりと勇儀の横顔を眺める。さりと顔を覆う絹糸のような金髪が妙に色っぽくて、

「橘姫もこれを見ればねえ」ぼつりと呟いた。

月明かりもまばらにしか差し込まない山の奥。その弱々しい月明かりは、派手な舞台照明より、まして地底の暑苦しい松明の灯りなんかよりも魅力的に勇儀を照らし出していた。

萃香の呟きなど聞こえない様子の勇儀をよそに、萃香は再び瓢箪を傾けて空を仰いだ。暗い空に、黒い影が見えた。

「あーや、あれは」

黒い影はすつと一時停止した後、萃香たちのほうを目掛けて再び羽をはためかせた。その羽は薄らと明度のある闇夜に混ざりそうに混ざらない漆黒。ざざざと音が近づく。その姿が大きくなる。羽の持ち主は萃香の予想通りで、だとすると予想通りに厄介な人物